

なだれこんだ鋼鉄の機動部隊

〈カット〉 鉄道のレールをのりこえて進撃するドイツ機甲部隊の4号B型戦車(7.5cm砲装備)——バルバロッサ作戦の緒戦を快調に勝ち進んだドイツ軍はモスクワをめざした。

■兵器研究家

齋 さい 木 き 伸 の 生 お

一九四一年六月二十二日、ドイツ軍のソ連侵攻「バルバロッサ作戦」は発動された。ドイツ軍は北、中央、南の三つの軍集団に分かれてソ連軍への攻撃を開始した。

このうちドイツ軍の攻勢主軸となつたのは北方軍集団と中央軍集団であった。

北方軍集団はバルト地区を進撃し、レニングラードに向かう。一方中央軍集団はスモレンスクを第一目標として占領する。その後、北に転じてレニングラード攻略に協力し、これ

を占領、バルト海の補給ルートを確保した後、モスクワ侵攻作戦にとりかかる。これがドイツ軍の作戦計画であった。

順調な北方軍集団の戦い

バルバロッサ作戦のドイツ軍の北の主軸、北方軍集団のレニングラードをめざす進撃は、所々でソ連軍の頑強な抵抗に直面したもの、各個に撃破され順調に進んだ。

その衝撃力の要である第四機甲集団(ヘブナー)には機甲三個師団

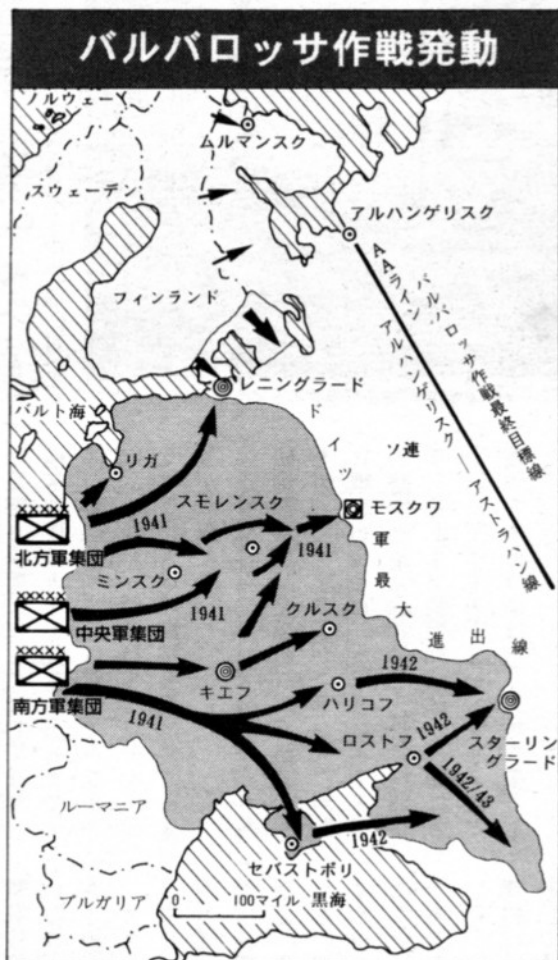
バルト三国と旧ソ連の国境にはスターリン・ラインと呼ばれる防衛線が築かれていた。この防衛線はバルト三国の併合でいったん放棄されたものの、ソ連軍はドイツ軍の急進撃を支える最後の砦として防衛線を固めようとしていた。

部のソ連軍は、ドヴィナ川を渡るこ

とができずにリガ前面で壊滅した。

機甲集団は七月二日にはヤーコフシユタットの橋頭堡からの出撃を開始した。快速部隊はラトビアを横断し、四日には旧ソ連国境を越えてオストロフに近づいた。

リトアニアとラトビア南



(第一、六、八)が集められていた。彼らは北方軍集団の南翼を進み、ソ連軍を分断してバルト海沿いに追いつめて行った。

機甲集団は六月二十六日には、ラトビアのダウガウピルスでドヴィナ川の橋頭堡を確保したため、左翼の第一六軍も翼側の危険を顧慮せずに前進することができようになった。彼らも七月一日にはドヴィナ川南岸に達した。

ドイツ軍によるソ連侵攻「バルバロッサ作戦」はなぜ失敗に終わったのか！

赤い大地に



機甲集団はその前に、防衛線を突破しなければならぬ。速度こそが武器、これが電撃戦である。

ヘブナーは戦車部隊に全速力での突破を命じた。

突破の先鋒となったのは、キルヒナーの第一機甲師団だった。オストロフを占領し、北のヴェリカ川の橋梁を確保した第一機甲師団は、さらに北方、ブスコフに向かって進撃を開始した。そして九日には、機械化歩兵の突撃でブスコフは陥落した。

同じころ第一機甲師団と並んで第六機甲師団も、三〇キロ南東でスターリン・ラインの突破に成功した。ペイプス湖南東岸のソ連軍防衛線は崩壊した。これによってエストニアのソ連軍の退路は断たれ、ドイツ軍のレニングラード進撃の準備は整った。

レニングラードへの突破口開く

レニングラードへの攻撃は、ペイプス湖とイリメン湖の地峡を、北に向かって進撃することになった。

第四機甲集団の二個軍団のうち、第四一機甲軍団（ラインハルト）はブスコフ・ルガーレニングラードへ続く街道を、第五六機甲軍団

（マンシュタイン）はその東をオボチカからノヴゴロドを通ってレニングラードへと並進する予定であった。

レニングラード南方は広大な湿地帯となっており、ドイツの機械化部隊が通行可能なのは、この二本の道路しかなかった。

七月十日、両機甲軍団はレニングラードへの攻撃を開始した。攻撃の重点となったのは右翼の第五六機甲軍団であった。

しかし、部隊の前進は順調にはいかなかった。敵はレニングラード防衛のために、イリメン湖西岸からルガ川に沿ってルガまでを要塞化して、頑強に抵抗したのである。

一方、第四一機甲軍団は、ルガに向かって前進した。ここでは最初、部隊はたいした抵抗を受けずに前進することができた。ソ連軍は退却をしていたのだ。

しかし、翌日には軍団の前進はにぶり始めた。ソ連軍は見通しの悪い湿地の森に防御陣地を構築して、ドイツ軍をむかえ撃った。

戦車の機動力を生かした迂回、突破が不可能となれば、正面からの力

特集 ☆ 電撃機甲戦

押ししかなない。

しかし、準備された敵とあつては、いたずらに損害が増すばかりで攻撃は進捗せず、攻撃は十二日にはサポリエーブリューサの線で行きづまってしまった。

もはやこれまでか。しかし、偵察の結果、ソ連軍はルガより北のルガ川流域には、軽微な防御態勢しか敷いていないことがわかった。この地域は道路事情が悪いため、敵はこの方面からの攻撃は無いと考えていたのである。

第四機甲集団司令官ヘブナーは大胆な作戦変更を行なった。第四一機甲軍団をルガ下流域に左に転回させ、ナルヴァーキンゼナップスクラスノグワルジェイスク鉄道沿いに攻撃を指向させたのである。

十三日、第一、第六機甲師団は、北へ転進して、ほとんど道なき道をしゃにむに前進した。十四日には第六機甲師団の先鋒はボレチエを占領、同じく第一機甲師団の先鋒もサブスク付近でルガ川に達し、夜までに川を渡ると東岸に橋頭堡を確保した。

電撃戦のチャンスを生かせず

こうしてドイツ軍はレニングラー

ドに向かうための最後の障害物ルガ川を渡り、レニングラード占領は秒読みに入った、かに思われた。

しかし、ここで奇妙なことが起こった。サブスクの橋頭堡で待機し、補給と再編成を終えた機甲集団に対する進撃命令はいつまでたつても来なかった。

彼らは三週間もの間、ここで無駄に待ちぼうけをすることになる。なぜか？

その原因はドイツ国防軍総司令部の不決断、ないし頑迷さにあった。彼らは最初に計画した右翼を攻撃重心とする構想にこだわるあまり、この好機を生かそうとはしなかった。

電撃戦とは単なる集中と速度を意味するのではない。それを生かして敵を混乱させ、作り出した好機に乗じて勝利をもぎ取ることこそが電撃戦の神髄なのだ。

八月八日、ようやく攻撃が再興されたが、この遅れはソ連軍に防衛線を固める十分な余裕を与えてしまった。

以前なら簡単に突破できたはずのルガ下流域を、機甲軍団は血みどろの戦いを続けつつ前進するしかなかった。激闘に次ぐ激闘、ようやく十四日に第一機甲師団は突破に成功し、レニングラードへの道は再び開

けた。

しかし、南部のスタラヤ・ルツサ付近でのソ連軍の反撃のため、再びドイツ軍の攻撃スケジュールは遅れることになった。

そのうえ第四一機甲軍団は側面が脅かされていたため、快速な突破ができず、一日一〇キロという緩慢な前進を続けるしかなかった。

一日一日はレニングラードの運命にとつて、数え切れないほど貴重な時間であった。その間にスターリンはかきあつめた兵力をレニングラードに投入し、全市民を挙げて防衛陣地の構築を進めていたのだ。

九月八日、レニングラードの東、ラドガ湖岸のシュリッセルブルクが陥落した。

これによりレニングラードとの陸上連絡路は途絶え、市は外部から孤立することになった。

この日、ついにドイツ軍のレニングラード攻撃が開始された。中心となったのはラインハルトの第四一機甲軍団で、市の南西からレニングラード最後の防衛拠点ドゥーデルホフ、ブルコヴォをめざす。

しかし、一カ月前なら気楽な進撃であつたらう、レニングラードまでの道程をラインハルトは、血でつかみ取らねばならなかった。ドゥーデ

ルホフの丘はソ連軍の要塞に変貌していた。

十日朝攻撃開始。ひとつの窪地、塹壕、タコツボをドイツ軍はしらみつぶしにするしかなかった。

十一日一時三〇分、ドゥーデルホフの丘は落ちた。丘からはレニングラードの市街が一望することができた。

しかし、この勝利は何の意味も持たなかった。この日ヒトラーはレニングラードを攻略しないことを決めたのである。

第四機甲集団は電撃戦の果実を味わうことなく、モスクワ攻略のため南へと転進していった。

主力「中央軍集団」の戦い

バルバロッサ作戦で、ドイツ軍最大の兵力が集められたのが、フォン・ボック元帥指揮下の中央軍集団であった。

中央軍集団はポーランド中東部から出撃し、ミンスク、スモレンスクとベラルーシ、ロシアの主要都市を奪取し、ブレストリヴィリニス、スモレンスク地区の敵を一挙に撃滅する。

奇襲によりブーク川を渡った中央軍集団各部隊の前進はきわめて順調



モスクワをめざす中央集団軍第3機甲集団を指揮するホト大将（上）

だった。個々のソ連軍部隊の抵抗はここでも激烈だったが、電撃戦の衝撃でソ連軍は完全に指揮統制能力を消失していた。

ひとつの典型例がソ連第一〇軍戦区の第四戦車師団の壊滅である。

ビヤリストク地区に展開した第四戦車師団はドイツとの開戦にあたって、ただ単にビヤリストク東方のピアロウイエツアの森で「待機」することを命じられたのである。そのあげく、師団は戦車と歩兵に分離され、バラバラに戦闘に投入され消滅した。

ドイツ機甲部隊はこうしたソ連軍

の抵抗は顧みず、ひたすら快速を生かして前進を続けた。

ポーランドから出撃したグデーリアンの第二機甲集団（第三、四、一〇、一七、一八機甲師団）は、プレストからプリピャチ湿地帯の北縁に沿ってバラノウイッチ、ミンスクへと突進した。

一方、東プロイセンから出撃したホトの第三機甲集団（第七、一二、一九、二〇機甲師団）は、リトニアのウイリニス、モロテチノから二十六日にはミンスクへと前進した。彼らは二十七日には手を結び、包囲を完成させた。

を後続する歩兵部隊に任せて、前進を再開した。

第二機甲集団の進撃は続いた。

機甲集団はポリソフとポブルイソフでベレジナ川を渡り、左翼から第三機甲師団、第四機甲師団、第一〇自動車化歩兵師団が併進し、翼側を第一騎兵師団が固めた。彼らドニエブル川に向かって前進を続けた。

しかし、ドイツ国防軍総司令部は戦車部隊の急速な前進に危惧を抱いていた。彼らは常に心配性だった。

「停止せよ！」「前進してはならない！」「歩兵部隊の追いつくの待て！」フランスでもここロシアでもいつもそうだ。当のドイツ国防軍総司令部自身が実は電撃戦を全く理解していなかった。

「ドニエブル川で停止せよ！」これが今回の命令だった。第二機甲集団司令官グデーリアンは第四軍司令官クルーゲと激論をかわした。

「ただちにモスクワへ進めば、本年中にも勝敗は決するのですぞ」この気迫に屈して、クルーゲはやっとグデーリアンに、ドニエブル川を越えての進撃許可をあたえた。

スモレンスクを奪取せよ！

グデーリアンはすぐに手を打っ

た。命令が飛び先遣部隊はドニエブルの重要な渡河点の偵察を行なったが、すでにロガチエフ、モギレフ、オルシャは防備が強化され要塞化がはかられていた。

ドイツ軍はしやにむに攻撃をしかけたものの、準備された敵に対する強襲では、損害ばかりがでて奪取することはできなかった。グデーリアンは偵察大隊を派遣する。偵察大隊は、ドニエブル西岸をくまなく捜索し、敵の防備の手薄な場所を発見した。

スターリイ・バイホフ、シュクロフ、コプシイのあたりだ。誰も知らない寒村で橋もない。ソ連軍はこんなところをドイツ軍が渡るうとは想像もなかったのだ。渡河作戦は成功に終わった。

十日から十一日かけて各部隊はスターリイ・バイホフ、シュクロフ、コプシイの橋頭堡を広げ、ソ連軍の防衛線に楔を打ち込むことに成功した。

工兵隊はドニエブル川に架橋を渡し、そこから重機材が対岸へと運び込まれた。

渡河が終われば前進あるのみ。それが機甲部隊の戦い方だ。

グデーリアンは、オルシャ、モギレフ、ロガチエフといった要塞を無

包囲が完了すると機甲部隊は残されたソ連軍の処分

小浜浩三


 妻と二人の
山歩き
本体1700円税別

好評発売中!

山歩きをいかに楽しむか。定番ガイドとはひと味違う山の手引き書!

妻と二人の山歩き

【実践篇】

北海道利尻や雄大な大自然の白神山地、富士山の展望を楽しむ山、駅から直接歩いて登れる手軽な山、北アルプスの山々など、草花や自然の景観を愛でながら、山城それぞれの興趣つきない味わいを伝える山のエッセイ。知識と経験を豊かにして山歩き安全に楽しむ冊。

 東京都千代田区九段北1-9-11
光人社の話題作

視し、ひたすら先を急ぐ。めざすはスモレンスク! 七月十五日、第二機甲集団は南からスモレンスクへの攻撃を開始した。

一方、同じ日に北からもホトの第三機甲集団の部隊が、スモレンスク北部を通過し、ヤルツェウオでスモレンスクーモスクワ道路を遮断した。スモレンスクへの連絡は断たれ、ソ連軍一五個師団が包囲された。

十六日スモレンスクは占領された。バルバロッサ作戦の第一戦略目標が占領されたのである。

モスクワまでは、あとわずか三五〇キロメートルであった。進撃命令さえ出されれば、グデーリアンの機甲部隊はたちどころにモスクワに襲いかかったであろう。

しかし、進撃命令はいつまでたっても来なかった。ヒトラーはモスクワ占領の前にウクライナの占領を命じたのである。

タイフーン作戦発動さる!

ウクライナの作戦はたっぷり二カ月、ドイツ軍の作戦を遅らせた。ヒトラーは九月六日にやっとモスクワ攻撃命令を発したが、実際には部隊の補給、再編成のため、モスクワ進撃が可能となったのは九月下旬のことであった。

二カ月前なら軽微であったモスクワの防御態勢は格段に強化され、もはやモスクワを電撃的に占領することは望み薄だった。

ドイツ中央軍集団によるモスクワへの進撃はモスクワの西、西南、さらにその南の三方から行なわれた。ホトの第三機甲集団はスモレンスクの北からモスクワ北方をめざし、ヘブナーの第四機甲集団はスモレンスクの南からモスクワをめざした。

一方、グデーリアンの第二機甲集団はショストカからオリョール、モ

スクワ南方のツィラをめざし、そこから北に転じてモスクワを衝くことになっていた。

この中で守るソ連軍にとってとくに脅威となったのは、南方から進撃するグデーリアンの戦車部隊であった。兵力の不足するソ連軍のヴィヤージマ、モジャイススク防衛線は、西と南西からの攻撃軸には対応していたが、オリョールからモスクワへの進撃路には十分な備えは行なわれていなかった。

快進撃を続けるグデーリアンは、ブリャンスク方面で突破口を作り、ソ連軍ブリャンスク方面軍を包囲するとともに、南からは真つすぐオリョールへと進撃した。

グデーリアンの進撃を止めるために、ソ連スタフカ(最高司令部)は、ドミトリイ・D・レリューシエンコ少将に、予備部隊をかきあつめて、第一親衛狙撃兵軍団を編成することに命じられた。

彼にあたえられた任務は、ムツェンスクからオリョール方面への反撃を行ない、ブリャンスク方面での撤退の時間を稼ぎ、合わせて部隊の再編成を行なつて、ムツェンスクでジューシヤ川に沿った新たな防衛線を築くことであった。

ドイツ軍は、十月三日にはムツェンスクまでわずか二〇キロのオリョールに達し、撤退する国境警備隊の連隊と砲火を交えていた。

この方面に侵攻したドイツ軍部隊は、第二機甲集団の第二四戦車軍団である。この内の第三、第五機甲師団は北のボルホフ方面に進み、第四機甲師団がムツェンスクへ進むことになっていた。

ムツェンスクの戦いはドイツ軍の予想外のものとなった。ソ連軍の第四戦車旅団長カツコフ大佐は、これまでのバラバラの戦いを止め、ドイツ軍の進撃を遅滞させるための巧妙な戦闘指揮を行なった。

このためグデーリアンの精鋭部隊は、八日間にわたってほとんど停止させられた。

十月十一日、ついにドイツ軍はムツェンスクを奪取したものの、秋雨によりそれ以上の進撃は全く不可能になってしまった。

ドイツ軍最後のモスクワ攻撃

秋雨で泥沼となった地面は、十一月初め、ようやく凍結によって再び固まり、車両の前進が可能となった。

十月攻勢でモスクワ前面三〇キロのカリーニン・ツォーラの線に進出していたドイツ中央軍集団は、十一月十五・十八日、モスクワ攻撃を再開した。

十五日、最初に行動を開始したのは軍集団北翼の第九軍、第三機甲集団（ホト）であった。

彼らはカリーニンからモスクワ北方をめざす。十六日、そして十八日には、第四機甲集団（ヘブナー）による、その南ヴォロコラムスクからモスクワをめざす攻勢も開始された。

そして同じく十八日、はるか南ツォーラからも、第二機甲集団（グデーリアン）による北に向かってモスク

ワに前進する攻撃も開始された。

こうして進撃は開始されたものの前進テンポは意外とゆるやかなもので、一日五キロからせいぜい一〇キロに過ぎなかった。凍結により車両はスリップに悩まされ、戦車でさえ滑り止めが無ければ斜面を上ることは不可能だった。

何よりも致命的なのは防寒装備の不足だった。まだ十一月だというのに、すでに気温は零下二〇度以下にまで低下していた。それなのに兵士には防寒シャツや下着、靴下、防寒ブーツは支給されていなかった。

このため戦闘による損害よりも、凍傷による損害の方がはるかに上回っていた。

車両も同じだった。燃料は一部凍結し、オイルも著しく粘度が増大したため、エンジン始動のためには車体の下からたき火でエンジンを暖めてやらなければならないありさまだった。

寒さのため光学機器は曇り、射撃に支障をきたしたが、必要な曇り止めは支給されていなかった。これら数々の問題で車両故障や事故が頻発し、稼働率ははなはしく減少していた。

もはやドイツ軍の攻撃は電撃戦と言えるようなものではなかった。

十一月二十三日、北翼を前進する第三機甲集団はクリン、ソルネチノゴルスクに達し、モスクワからレニングラードへ向かう鉄道幹線を切断した。

ソ連軍はモスクワ北方の危機にたいして、予備部隊やモスクワ守備隊を投入してなんとか対処した。第三機甲集団はなんとか前進を続け、二十八日にはヤフロマ付近でヴォルガ運河を渡ることに成功した。しかしそこまでだった。

急きよ防衛のためソ連第一突撃軍が投入され、第三機甲集団の進撃は停止した。

南翼では十月末、第二機甲集団がツォーラ前面四キロに取り付いたが、敵の強力な対戦車砲火によって市を奇襲により奪取することはできなかった。このためツォーラを東側から迂回する攻撃を試みたものの、ソ連軍の反撃で手づまりとなった。

グデーリアンはツォーラ攻略のため東西両翼からの挟撃をくわだてたが、十二月二日に開始された攻撃は、兵力不足と零下五〇度という猛烈な寒気によって頓挫した。

しかし、その南ではまだ第四機甲集団がまだ前進を続けていた。十二月一日、第二機甲師団はモスクワの中心、クレムリンから三〇キロの地

点まで到達した。

さらにその中の戦闘工兵の突撃班は二七キロのロブニャ駅まで達し、これを爆破した。そしてそのオートバイ斥候はクレムリンから一八キロ、モスクワ市外縁部からわずか八キロ（！）のヒムキまでたどりついたのである。はるかかなたにクレムリンのワシリエフスキー教会の屋根の「ネギボウズ」が望まれたというが、そこまでだった。

十二月一日になってようやくモスクワ正面の第四軍の攻撃が開始されたが、これはタイミングを失し、そしてあまりにも微弱な戦力でしかなかった。

わずかに前進して二日にはクレムリンから四四キロまで到達したが、三日には反撃を受けもとの攻撃発起点に押し戻されてしまった。

ドイツ軍はモスクワ前面すべての戦線でもはや前進できなくなった。

十二月五日、青息吐息となったドイツ軍に対してスターリンの反撃が開始された。ドイツ軍にはもはやこの攻撃を撃退する力は残っていないかった。

十二月末までにドイツ軍は完全にモスクワ前面から駆逐され、モスクワを攻略するチャンスは二度と来なかった。